

## A-4

## 博物館におけるオンライン型ワークショップについての研究

## —「おうちで天体観測・みんなで星を描こう」の実施から—

## Research on online events in museums

## -From the implementation of "Astronomical observation at home, let's draw stars together"-

○田中裕基<sup>1</sup>, 伊豆原月絵<sup>2</sup>\*Yuki Tanaka<sup>1</sup>, Tsukie Izuhara<sup>2</sup>

Abstract: In recent years, the spread of infectious diseases has required changes in the activities of museums. As face-to-face interaction with visitors has been restricted, online events that can be taken from home are now being held. In this paper, it was found that online events require more participation experience and communication than face-to-face events. In addition, the ability to participate from the comfort of one's own home allows participants to express their emotions more fully, and we recognize the value of holding online events regardless of the impact of infectious diseases.

## 1. はじめに

博物館には、遊び場として利用する親子連れから、学びの場として利用する大人まで様々な人が来館する。そのため博物館ではターゲットの異なる多様なワークショップを開催している。例えば筆者の田中が勤めている、東京都西東京市にある多摩六都科学館では、未就学児とその親を対象にしたアート系ワークショップや、小学生を対象にした科学に触れる工作・実験・観察教室、高校生や大人を対象に科学者から最新研究や先端科学について学ぶ講演会などを開催している。

そんな博物館や博物館で開催されるワークショップの形態であるが、2019年末から世界中に感染拡大した新型コロナウイルスの影響により、感染者の多い地域では緊急事態宣言を受け様々な施設が閉鎖された。文化施設である博物館も例外でなく、一時的な休館を余儀なくされた。また開館した後も、人数や体温による入館制限や手指消毒、ソーシャルディスタンスなどの感染症対策の徹底が求められ、ワークショップも従来の形式では開催が難しくなった<sup>[1]</sup>。そんな中脚光を浴びたのは、来館せずに自宅から参加できるオンライン形式のワークショップ<sup>[2]</sup>である。

筆者らは過去に3回対面形式で「野外博物館・星を見る会(観望会)」を開催してきたが、2021年に初の試みとしてオンライン形式で開催した。

本論文ではワークショップの開催報告とともに、オンライン型ワークショップ(以下オンライン型)が、ポストコロナとなり社会活動が再開された現在もコロナ禍同様に支持され続けている理由について考察したい。

## 2. オンライン型の一例

1: 多摩六都科学館 2: 日大理工・教員・一般

## 「おうちで天体観測・みんなで星を描こう」

「星を見る会」は日本大学理工学部で学芸員養成課程(以下学芸員課程)を履修する学生の実践的な経験の場として、有志学生が運営に参加して開催していた。

2021年に開催した「おうちで天体観測・みんなで星を描こう」は、大学でも対面学習が行えない中、学部3年生3名と大学院生3名とともにオンラインで準備を進めて開催に至った。

ワークショップはメインターゲットを小学生として、小学生とその家族を対象にした。Google フォームを利用した事前申込制で、16件(小学生18名)の申し込みがあり、当日は小学生15名とその家族が参加した。学年の内訳は図1の通りで、星について授業で学習する高学年だけでなく、全ての学年の申し込みがあった。

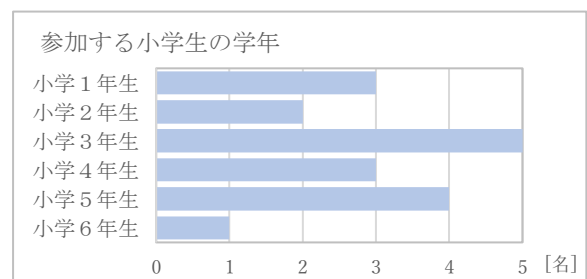


Figure 1. Grade of elementary school students participating in the event

## 3. オンライン型の対面型との違い

## 3-1. ワorkshop企画段階

例年の「星を見る会」は、室内でプラネタリウムソフトを用いて、その季節に見える星や天文の話の話を聞いた後に、外に出て望遠鏡で星を見るという内容で開催していた。なかでも自分で望遠鏡を覗くことは日常で

はなかなか経験できないことであり、実際に望遠鏡で星を見る点が魅力になっていた。

今回オンライン型の企画に際して以下の点に留意した。1. オンラインでは画面越しのコミュニケーションとなる。2. 望遠鏡で見た星がただ画面に映るだけでは、自分で星の写真を画像検索しているのと変わらない。3. 天体の話や望遠鏡の映像を流すだけでは、参加者は一方的に視聴するだけの講演会となり、参加体験性が生まれない。そこで、これらを解決する方法として、メインの企画を、「みんなで星を描く」ことにした。参加者には、事前にワークシートのPDFをメール添付で送り、事前に思い思いの星座の絵を描いてもらう。ワークショップでは、それぞれが自宅のPCのカメラから一斉に映すことで画面上に、その時間だけのオリジナルの星空を作るというワークショップである。



Figure 2. Starry sky drawn by participants

### 3-2. ワークショップの実施から

「おうちで天体観測・みんなで星を描こう」はワークショップの性質上、参加者の顔が見えるようにカメラをつけた状態での参加を求めた。参加者に対して質問をすると対面のワークショップさながらとても元気に手を挙げて答える様子が見られ、表情からは以下のことが読み取れた。

- ・クイズや質問を交えての解説を楽しく聞いていた。
- ・一方的な解説が続くと低学年の参加者は少し飽きている人もいた。
- ・途中飽きてしまった人も、後半の「みんなで星を描く」時間を楽しみに最後まで聞いていた。

またワークショップ終了後には Google フォームで作成したアンケートを参加者にメールで送付した。2週間の間に全体の約半数の8名から回答があった。オンライン型に対する感想は図3の通り、約半数が「家から参加できたこと」や「目の前の画面で見られたこと」が良かったと回答していて、7割の参加者が今回のワークショップが楽しく、実際に外で星を見ることへの興味が増したことが分かった。

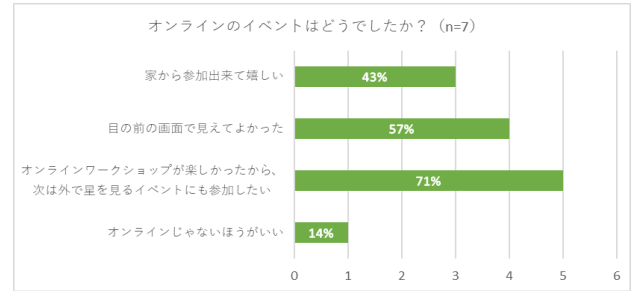


Figure 3. Satisfaction survey after the event

### 4. 考察

オンライン型は自宅からリラックスした状態で参加できるため、画面の中の相手への集中力は対面型よりも低くなる。また自宅には目移りするものも沢山あり、一度飽きてしまうと再度集中して聞いてもらうことは難しい。そのため飽きさせない工夫や内容構成が対面型よりも重要になる。

またアンケート結果から、オンライン型に対するネガティブな意見は1割で、多くの参加者がコロナ禍における文化活動へ参加手段としてだけでなく、オンラインならではの利点に魅力を感じていると考えられる。

### 5. まとめ

今回ワークショップの実施から、オンライン型ならではの特徴が分かった。博物館側は、対面でないため、これまで以上に体験性とコミュニケーションが求められる。参加者側は、自宅でリラックスした空間だからこそ、元気に手を挙げたり、画面に映った月に感動した表情や楽しそうに自分の描いた星座を持つ様子など、対面型で実施する以上に豊かな感情表現が見られた。参加者自身も家から参加できるオンラインという形式に利点を見出していることから、ポストコロナとなった現在も需要があり継続して開催されていることが分かる。

コロナ禍において活動を続ける手段に過ぎなかったオンラインという形式には価値があり、博物館の活動の新たなツールとなった。

今後もより良いワークショップを目指して、オンライン型のあり方を考え、引き続き開催していきたい。

### 6. 参考文献

- [1] 熊野有祐：「コロナ禍を踏まえた国立科学博物館における ICT を活用した学びの確保について」、全国科学博物館協議会研究発表大会, Vol.28th, pp. 79-86, 2021.
- [2] 中島 徹：「博物館のオンラインの取り組みは次のステージへ」、美術による学び, Vol.2, No.11, 2021.